

英語 1 2006 年度・冬学期・1 年生試験略解 (文責: ★Ria★)

A. Nationality (Introduction l.1~41)

Introduction からの出題です。用いる語彙の水準, 単語, 文法などの「言語的手段(linguistic devices)」を使い分けることで, 文章の書き手は(自分自身を含めた)登場人物の像を作りあげる(contrive)ことができる。このとき使われたさまざまな「言語的手段(linguistic devices)」は, 登場人物のセリフと違って直接読みことのできない **silent** なものである。この「言語的手段」を通して表現された登場人物像を **Sloppy** は音読をする際に声を使い分けながら表現するので, Mrs. Higden は **Sloppy** に新聞を音読してもらうのが好きなのである。※残念ながら、Introduction は本文には直接関係しません。Introduction の著者は教授としての瀬地山角を知っているからこそ、教授としての瀬地山角と父としての瀬地山角の違いを Introduction で書いたのでしょう。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|--------|
| (1) b | (2) a | (3) a | (4) f | (5) b |
| (6) h | (7) d | (8) c | (9) e | (10) a |
| (11) b | (12) e | (13) f | | |

B. Listening (l.120~140)

O'Connell-Rodwell が知られていなかった象の音波の認識方法を紹介している部分である。我々は「音」を耳の鼓膜の振動として認識するため、「音」は空気の伝播によってのみ伝わると考えがちだが、大型哺乳類は地面の振動を「音」として認識しているらしいことが実験から明らかになってきている。ここでは、「音」の空気を媒質とした伝播と地面の振動による伝播、およびそれらの認識のされ方を比較している。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| (14) b | (15) g | (16) c | (17) f | (18) a |
| (19) d | (20) a | | | |

C. Empire(l.64~79 と l.85~97)

Sherlock Holmes が生きていたとされる英国の帝国時代の時代背景について説明した部分である。帝国時代の英国人は、未知な英国植民地の人々や文化が奇妙で野蛮なものに思え、それが英国に流れ込んできていることに危機感を抱いていた。当時の英国人は、Sherlock Holmes のように誰とでも上手くやっていけて、未知な英国植民地を自ら訪れて調べる行動力と勇気のある人を求めていたのである。

(21) d (22) f (23) e (24) a (25) d
(26) d (27) b

(ア) an atmosphere of impending chaos and doom

(イ) こんなにも大規模で荒れた奇妙な世界を彼らは理解、ましてや統制できるとは思っていなかった。

※ (26) b. besides to は正しくは besides でなくてはいけないはずです。

D. Babies (l.119~129)

受験の4 (A) でもお馴染みの、多くの人が手こずったと思われる文法問題です。

筆者は、乳児がどのように世界を認識しているか知るためには、まず「乳児の経験の観点から、乳児にとっての乳児の環境を考えなければいけない」と主張し、出題文はこの主張をまとめた部分である。本文にでは、この考え方は「精神の活動を様々な領域（認知・知覚・動機など）に分けて個別に考える」という従来の考え方と対比されている。

(28) g (29) h (30) a (31) g (32) b
(33) e (34) e (35) j (36) a (37) h

※文法的に解くなら、(い) は文法的に解くことは難しいので、最後に消去法で解くとよいかもしれません。